

## 三好達治の詩的空間

### — フランス詩との関わりをめぐって —

柏 木 隆 雄

#### 要 旨

昭和初期から30年代後半にいたるまで、抒情詩人として活躍した三好達治の詩業は多くの詩集に窺われるが、詩作の根底に彼が学んだフランス語詩の影響がある。人口に膾炙する彼の『測量船』中、取り分けて有名な「雪」と「麓のうへ」の両詩について分析を試み、「麓のうへ」については、フランス詩とのかかわりで新たな視点を得ようとする。またジュール・ルナールやフランシス・ジャムの詩の読書体験から、三好の詩作に与えた影響を探る。さらにその詩的生涯において特記すべき、福井県三国町での戦中・戦後の生活についても考察を加える。

キーワード：1. 三好達治 2. ポートレール、フランシス・ジャム 3. 『測量船』  
4. 日本詩の押韻

#### はじめに

三好達治という詩人は、小学校、中学校、あるいは高等学校の国語の教科書などでよく知られており、俗に「国民詩人」と称される一人に数えられている。たとえば「艸千里濱」という詩などは、その冒頭の数行「われ嘗てこの国を旅せしことあり/<sup>あけがた</sup>味爽のこの山上に われ嘗て立ちしことあり/肥の国の大阿蘇の山/裾野には青草しげり/尾上には煙なびかふ 山の姿は/そのかみの日にもかはらず/今日もかも/思出の藍にかげらふ」の詩句を、修学旅行で阿蘇山を訪れた際、思わず口ずさんだ人が、私以外にもきっとあるはずだ。そして

「しかはあれ/若き日のわれの希望と/<sup>のぞみ</sup>二十年の月日と 友と/われをおきていづちゆきけむ/そのかみの思はれ人と/ゆく春のこの曇り日や/われひとり<sup>よわひ</sup> 齢かたむき/はる

ばると旅をまた来つ/杖により四方をし眺む/肥の国の大阿蘇の山/駒あそぶ<sup>たかはら</sup>高原の牧/  
名もかなし艸千里濱) (『艸千里』昭和14年 四季社刊) の叙情は、まさしく三好達治  
の本領を遺憾なく伝える詩句だろう。

筑摩書房から12巻で出ている彼の全集は、必ずしも断簡零墨までも伝えた完全な全  
集ではない。文人氣質の強い三好達治は、自作の取捨にきわめて厳しかった。甲子園  
で戦う高校野球チームが勝利すると、その校歌が斉唱される。それらの作詞者に白  
秋、晩翠、西条八十など常連の名が並ぶ中、三好の名はない。彼らと同等あるいはそ  
れ以上と思われる詩業を残した三好達治には、きわめてゆかりの深い福井県の三国高  
校と大野高校の校歌の他、伊藤整の懇望による東京工業大学歌、友人に頼まれた角館  
中学校歌と濱名高校歌の計5作しかない。降るような校歌の注文を、彼は頑なに以下  
の理由ですべて断っていたという。すなわち自分は詩人としていつ不行跡で評判にな  
るかもしれない、その時、歌う人たちが恥ずかしい思いをすることがないように校歌  
は作らない、と。いかにも古武士然とした三好達治らしいエピソードである。

## 1. 「雪」の世界

三好達治の詩といえば、さきほどあげた「艸千里濱」のほか、教科書などに採録さ  
れ多くの読者に親しまれて一番有名なのは「雪」という作品だろう。

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。<sup>1</sup>

わずか二行の詩ながら、含蓄のある、さまざまな詩的イメージを誘う、優れた作品  
で、二行の詩句は、いろいろな解釈の可能性を秘めており、さればこそ万人の胸に届  
く名作とされる所以がある。

雪国の田舎家の子供が二人、静かに降り積もる深沈たる夜の中に眠り、その長男た  
る太郎、次男である次郎もまたその横で眠りこける、と解釈するのが一般的だろう。  
しかし、もし眠り込む時間からすれば年少の次郎から眠り込むはずで、そうすると詩  
の順序が違う。初行は次郎を眠らせ、とならないといけない、などと理屈を言うこと  
もできる。しかし果たして太郎と次郎とはそもそも兄弟を謂うのか。あるいは太郎と  
次郎は隣どうしの遊び相手で、散々昼間遊び回って疲れ果て、彼らの遊んだ跡をかき  
消すように雪が積もり、太郎も次郎も静かに寝入っている両家の屋根にも降り積も  
る、とも解釈できる。あるいは太郎、次郎も、子供ではなく一人前の大人であること

---

1 三好達治「雪」、『三好達治全集』第1巻、筑摩書房、昭和39年、9頁。

も考えられる。すると二人の寝入る姿も、またそれなりに意味が深まってくる、と言った形で、詩と言うものは理解するものではなく、感じるものだ、ということを得させる詩の一つが、この三好達治の「雪」という一篇である。

しかもまた、この詩を雪国の光景としたが、必ずしもそのように読まねばならぬ必要はない。普段は暖かい国の一夜、思いがけず降り積もる雪であることも可能だし、太郎の屋根、次郎の屋根、それぞれ別なのか、一軒の家に太郎と次郎の二人が寝ているという複雑な組み合わせも思い浮かべられる。のみならず「眠らせ」とあるからには、雪の降ることによって、本来寝入ることのできない状況にある太郎、次郎が、雪の静かに降り積もる中を眠ることになる、そうした精神的な事情まで憶測することも可能だ。詩人が幼い頃、舞鶴の家具商に養子に行く約束で過ごした雪のその地の一夜を思い出しての詩句という説もある<sup>2</sup>。加えて「眠らせ」る主語は何か。普通の文法では屋根に降り積もる雪には違いなかろうが、日本の俳諧的流儀で読めば、「眠らせ」るのは、添い寝する母親（あるいは父親…その他姉、兄、情人、いずれも読む人の情感、想像によって当てはめることができる）とすることも、もちろん可能である。

いずれにせよ、そうした様々な異空間を背景にいろいろなイメージを膨らませる感覚を生む背景には、この詩が深々と降り積もる雪をイメージさせるのに、太郎、Taro と明るい音で始めながら、最後 Yuki-furitumu と (u) の音が2行の行末に繰り返されるところにもある。モーリス・グラモン『フランス詩法』(Maurice Grammont, *Le vers français*, Delagrave, 1967) の所説を踏まえて、ルネ・ウェレックらは、「一つの言語体系の中には、語の『骨相学』のようなもの、すなわち単純な擬声語より、はるかに力のある音、象徴が存在するのである。高母音 (e, i) と薄い、速度の高い、明晰かつ明るい物体との、また低母音 (o, u) とぶざまな、のろい、退屈な、暗い物体との間の、根本的な連想は音響上の実験で立証することができる」という<sup>3</sup>。三好の詩「雪」において u とか o といった音が重用されて、重く、暗い、遅いもののイメージが、実に巧みに強調されているのがわかるだろう。

繰り返しの詩句「屋根に雪降り積む」もまた Yane ni Yuki furitumu と、Ya の音で始めて、謂わば A の文字形を発話者の脳裏に描かせるように、大きく覆う屋根をイメージさせながら、だんだんに ne, ni と音を緊張させていって、Yuki, furitumu と u の音が4つ重なることで、重く、暗く、静謐な音律を響かせている。

このことは決して偶然に帰することはできない。昭和27年(1952)に至文堂の「学生教養新書」の一冊として編まれた『詩を読む人のために』の最初の節、「『千曲川旅情

2 2015年2月1日『読賣新聞』日曜版「よみほっと」1面に前田恭一記者の文にある。

3 R. Welleck & A. Warren, *Theory of Literature*, Penguin Books, 1963. p. 162.

の歌』について」で、三好は詩語において音律がいかに重要な働きをするかを強調しているからだ。

学生向けのこの解説書の中で、取り上げた島崎藤村の作品中「最も出来栄えのすぐれたものとして、永く人口に膾炙されて、古典的名作と称される所以」を2つあげ、その第1のものとして三好達治は、音韻上の理由をあげる。詩の冒頭2行を Komoro naru Kojyo no Hotori / Kumo siroku Yusi Kanasimu とローマ字書きして、

第一行には八個の<sup>+-</sup>Oがありますが、その第二第三番目、また第四第五番目の如きは（とりわけその第三第五の如きは）、この一行をただ自然に私たちが読むものとして、最も音量の多分なものをそこに置いて、必ずや読み進んでゆくことになるでしょう。（略）そういうぐあいの構造の第一行に続いて、第二行に移ると、その上半部にはなおO母音が二度くりかえされるのを見ます。それは前行からの余韻をそこまで持越したような効果をそこに担いながら、同時にそこから、<sup>+-</sup>U母音のくりかえしが始まります。U母音はこの行において四回くりかえされますが、その三回は上半部中央までのところに集まっていて、しかもその二回は明確な響きをもつK子音をともなっていて印象的に快く耳をうちます。なおその上に、更に詳しくいうと、その個所におけるUとOとの位置は、Iを中心にしてひっくりかえしになった上でそれがまた対照的になっていて（略）、その構造が大変面白くできているのに気がつくでしょう。<sup>4</sup>

と、詩の音調にきわめて重要な役割を認めていることから、三好の音韻尊重は理解できる。三好の「雪」もまたある意味でこうしたUの音が醸し出す殷々たる、かつじょうじょう嫋々たる雰囲気によって、先に掲げた様々な詩解を誘うのだ。

## 2. 「鶯のうへ」

「雪」に続いて彼の処女詩集『測量船』に収められている「<sup>いし</sup>鶯のうへ」についても同じことが言える。「<sup>いし</sup>鶯のうへ」は三好の詩の骨格を最もよく示す初期の代表作である。

鶯のうへ

あはれ花びらがなれ

をみなごに花びらがなれ

をみなごしめやかに語らひあゆみ

4 三好達治『詩を読む人のために』、岩波文庫、1991、18-20頁。

うららかの 登<sup>あしおと</sup> 空にながれ  
をりふしに 瞳<sup>ひとみ</sup> をあげて  
翳<sup>かげ</sup>りなきみ寺の春をすぎゆくなり  
み寺の 覺<sup>いらか</sup> みどりにうるおひ  
底<sup>ひきし</sup> 々に  
風鐸<sup>ふうたく</sup>のすがたしづかなれば  
ひとりなる  
わが身の影をあゆまする 麓<sup>いし</sup>のうへ

『測量船』（昭和五年）

この詩について、三好自身、後年次のような発言をしている。

詩は、ただ言葉の都合で、そのみで、そこから組み立てられてゐる。創作だから作り出されてゐるものと、受けとつてもらひたい。

そこに含蓄されてゐる、すべての感覚的内容、視覚的要素、心理的表象、ないし気分、ムード、言葉の連鎖もつれあひに従つて生ずる進行する情緒、それらは、このひとまとめの構造（一作品）に直接的に關してゐる限り、右のやうにまつたくの架空の上に立つ。（略）

詩は読者の側で、めいめいがその受け取り方を一つの創造として、自由に、だから楽しく、受けとるべき筋合いのものである。（略）「みてらのいらかみどりにうるおひ…」とただその音韻を舌頭に味つてみるだけでも、十分ことは足りるのである。<sup>5</sup>

ここでも三好は、詩は音韻からまず味わうべきで、そこに自ずから詩の情感が感得されるはずだと、先に藤村の詩の解釈の際に述べたことを自作に敷衍している。語るに落ちる、という俗っぽい言い方はふさわしくなからう。むしろ三好の詩を解く秘密の鍵を図らずも明かしてしまっていると言うべきだろう。実際、この詩もまた「雪」に於けるのと同様、母音や子音が見事に詩情を構成して一つの世界を作り上げている。

季節はまさに花散らむとする頃、4月半ばであろうか。その春の愁いを含みつつ、艶やかなエロスさえほのかに香らせて、きわめて抒情的に、青春の1コマを歌った「麓のうへ」は、まず前半、儂げな花卉が風に舞う情景から始まる。この時、第一句

5 三好達治「麓のうへ」、昭和36年6月臨時増刊号『国文学解釈と鑑賞』（至文堂刊）、筑摩書房版『三好達治全集』第6巻、287-288頁。

の「花びら」は何枚だろうか？おそらく読者はひとひらの花びら、おそらくは春の花である桜が散っていく様を、まず思い浮かべるのではないか？「あはれ、花びら流れ」は、ふと青い空をひらひらと流れる一片の花びらに気づいて、思わず発する言葉として聞こえる。そしてその花びらは、折しも歩を運ぶ乙女の上に流れていく。この時、花びらはひとひらではなく、ひらひら、ひらひらと何枚も乙女に降りかかるイメージとなる。

ではその乙女は？まずひとひらの桜の花びらが落ちていく。その先を追うていく詩人の目に、歩を運ぶ1人の乙女の姿が目に入る。そしてその乙女に、はらはら、はらはらと複数の花びらが降りかかるのだ。はたしてその乙女はたった1人で歩いているのか。第2行の詩句はあたかも1人きりでいる女性を想像させるが、おそらくは花びらのようにはかなげに美しいその乙女は、1人ではない。最初に詩人の目に留まった乙女と連れ立つもう1人の女性が、彼の目に入っている。そのことは次の詩句でわかる。「をみなごしめやかに語らひあゆみ」、すなわち2行目の「をみなご」は単数であり、第3行の「をみなご」は、「しめやかに語らひあゆみ」とあるから、少なくとも2人以上で声を掛け合っていることになる。日本語には西洋語のように単数と複数の語の違いがない。おなじ「をみなご」の語を連続して使いながら、詩人はこの日本語の特性を見事に生かしているのだ。これは三好達治が単数、複数が明確に区別されるフランス語を学習していればこそその離れ業といえよう。

そして乙女たちの足音が響いて、彼女たちは瞳を空に向ける。そのまなざしに引きずられるかのように、詩人もまた天を見上げる。そこには青い春の空が広がって、いわば女性たちの足元から、そのまま垂直に詩人の視線が（と同時に読者の視線も）上がって、爽快な一場の光景となる。次の「翳りなきみ寺の春」の句は、女性の瞳が見上げる寺の上に、空が晴れて雲のないことを示すが、彼女たちの瞳もまた翳りが<sup>かげ</sup>ない。そこからの連想として、むしろ瞳に映る空、それを見つめる詩人の眼を感じることができるだろう。

その彼女たちの瞳に映る寺も、光景も、「すぎゆく」ものにほかならず、「甃のうへ」という詩が、おのずから流麗感をともなうのも、第1行「花びらながれ」、第2行「花びらながれ」、第3行「語らひあゆみ」、第4行「空にながれ」、第5行「をりふしに瞳をあげて」まで、すべて動詞の連用形が用いられて、動的感情が続くとともに、すべてア行の音が連なって、a, e, iの母音の明るく穏やかな風情が、おのずからまき散らされるということになる。つまり、すべて動詞の連用形を用いることによって、ひたすら動いて過ぎて行く様を強調している。のみならず、それらの連用形は、e(エ)という音を連続して響かせることによって、いっそうの流動感を与えている。

過ぎゆくものは何か。花びらであり、をみなごである。今、春を満喫している桜、

乙女、あるいはそれらは、すなわち「春」という時そのものにほかならぬ。それを痛感する場所が、諸行無常を実感する場としての「寺」、すなわち「花」や「をとめご」が象徴する生と対峙する死を包摂する「み寺」であるのは、まことに合点がいく。

青春の愁い、と先に記したが、若い男性としての詩人の思いが、をみなごたちの動的な姿態から、或る意味でほのかなエロティズムに感応して、「<sup>いらか</sup>覺みどりにうるおひ」や「<sup>ひさし</sup>廂々に」、そして「風鐸のすがた」が、活き活きと読者に響く。なぜなら緑という色は女性の黒髪につながり、廂はまた女性の庇髪を連想させ、(廂々と同じ言葉を重らせて、イメージを強調しているところに、語らい歩む複数の女性を髣髴させるからだ)、そして風鐸のすんなりとなで肩の優しい姿も、女性のそれを思わせ、おのずからこれまでのイメージを全体として包み込む。まさしく詩人自身が嘆じて、

あたりの翠緑が映じてゐるのか、「覺」は「あかがね」で、それが青く錆びてゐるのか、または「かはら」が古びて苔むしてゐるのか、そのいずれを指すのか、いずれの状態であるか、などという突飛な御質問に接する。私は軽い驚きと、返答のしやうのない困惑を覚<sup>6</sup>える外はない。

と言うように、彼に寄せられる小、中学校の国語の教員たちの質問の多くが、いかに詩を理解しないものであるかは、詩人とともに一驚するほかはない。

ついでに言えば、「<sup>いし</sup>甃のうへ」の「甃」は、作者の言うところによれば、「<sup>いし</sup>甃石のうへ」としようとしたらしいが、やむを得ず(おそらく音調と字面から、そのように決することになったのだろう)現在の題にしたのだという。<sup>7</sup>「甃」は敷き瓦が本来の意で、寺の敷石としてその字がふさわしいかどうかは、さすがに詩人も迷ったことだろう。おそらくそれは甃の字が「しゅう」と読まれて、愁を連想させ、しかも春の意の対極にある秋のイメージさえ脳裡に沸き起こさせる機能を持つからに違いない。

「<sup>いし</sup>甃のうへ」において、このように詩人の目に映じたすべてのイメージが流れ、動いて、最後には姿を消していく。しかし、動的に描かれているすべての対象物、人物や風景が軽やかに動いて消えていく中に、ただ一つ動かぬものがある。すなわち詩人その人だ。彼1人、動き移ろい行く時と場所の中で、動かず、立ち止まってひたすら動きゆくものを凝視している。最後の詩句「わが身の影をあゆまする」は、もちろん詩人がゆっくりと歩むことを示しているには違いない。しかしよく紙背に徹すれば、動くのは詩人自身ではなく、太陽が動いて、彼の影が歩いているように動く、と解釈

6 前掲書、287頁

7 同書、286頁



できる。「あゆまする」は自動詞とも読めるが、また詩人の影を「歩ませる」他動詞とも読めるからだ。すなわち、これもまたゆっくりと、時の流れを噛みしめることになる太陽の動きにほかならず、時と場所と、いずれも変転流浪していく中に、詩人が感慨を噛みしめる形で終わって、青春の何とも知れぬ甘い、しかし切ない瞬間を詠って間然するところがない。

こうした感覚を読者に実感させるのに大きな役割を果たしているのは、五感を駆使した表現である。まず「花びらがれ」と視覚に訴える。次に「をみなごしめやかに語らひ歩み」、「うららかの足音」とあって、ここでは聴覚が強調される。つぎには「み寺の薨みどりにうるおひ」で、視覚と同時に「うるおふ」という触感があり、をみなごらの緑の黒髪を連想させることで、嗅覚まで動員されることになるのだ。五感を駆使した詩句を縦横に用いることによって、最後の詩句「わが身の影をあゆまする<sup>いし</sup>薨のうへ」は、その「ひとりなる」という言葉で、五感がそれを備えた詩人の一身に閉じ込められ、一人ある詩人の孤独感が、くっきりと浮かぶわけで、さればこそ、肉体そのものではなく、その詩人の「影」が、差し照らす太陽の光のままに、「あゆむ」という表現によって、彼の孤独がいっそう浮き彫りにされるとともに、きわめて诗情豊かに詩が閉じられるのだ。

### 3. 「薨のうへ」の淵源

ところで、寺の敷き石の上に映る自分の影がゆっくりと歩む、というイメージ、これは奈良の風光を愛して、その美を歌った会津八一の『南京新唱』にある月夜の唐招提寺での感慨を歌った1首を想起させる。

唐招提寺にて

おほてらの まろきはしらの つきかげを つちに ふみつつ ものをこそおも<sup>8</sup>へ

『南京新唱』は大正13年10月に出て、発刊当初はそれほど評判にならなかったが、昭和も初年の頃には秋艸道人の名声は高まっていたから、おそらくは三好の読書のリストにあったに違いない。詩人の目に映じるものを歌って、しかもあたかも客観的に自らを韜晦して詩の中に登場させるのは、同じ『南京新唱』の中にある「平城宮址の大極芝にて」と詞書きのある歌と通底する。

はたなかの かれたる しばに たつひとの うごくともなし ものもふらしも

---

8 会津八一『南京新唱』、『会津八一全集』第1巻、中央公論社刊、昭和43年、19頁。



はたなかに まひ てりたらす ひとむらの かれたるくさに たちなげくかな<sup>9</sup>

これら秋艸道人の3首に、三好の「鶯のうへ」の詩趣と似通うものを感じるのは論者だけであろうか。八一の唐招提寺での歌については、八一自身もその『渾齋隨筆』（昭和17年10月刊）に言うように、そもそもの元となった『万葉集』にある三方沙弥の歌、

たちばな 橋の 影踏む道の やらまた 八衢に ものをぞ思ふ 妹にあはずて

を思い起こさないではない。<sup>10</sup> こうして三好達治の「鶯のうへ」の詩興に立ち返れば、昭和初期の詩人の感慨が、遠く奈良朝の歌人の感慨へと連なって、あるいは、古代の歌の記憶が、大正期会津八一の短歌の世界となり、それが三好達治の中に一つの円環を成すように回帰することになった、と言うこともできよう。三好の作は、大正15年、同人誌『青空』7月号に載った。まさに詩歌の伝統という、さらにスケールの大きな世界を垣間見る思いがする。

しかし「鶯のうへ」の詩趣は、単に日本の文学的伝統に則っているばかりではない。この詩には、フランス文学、とりわけフランス詩を勉強した三好達治ならではのものが見出せるように思われる。すなわち、この詩の6行目から7行目あたり、いわば視点が「をとめご」から「天」へと移る重要な箇所、「をりふしに 瞳<sup>ひとみ</sup>をあげて／翳<sup>かげり</sup>なきみ寺の春をすぎゆくなり」について今少し注意を凝らしてみよう。

この2行、乙女たちの瞳に青い空に映える寺の伽藍が映っている。その瞳の中の伽藍は、乙女たちの動くままに、動いていく。このように女性がいて、その女性の瞳を見、その瞳の中に映っている光景を見るのは、それらを凝視する詩人その人である。これは、ボードレールの『悪の花』（*Les Fleurs du mal*, 1856）中の有名な詩「旅への誘い」（*L'Invitation au voyage*）において、恋人の眼の中に映る閨房のありさまを、詩人が見る技巧を取り入れているのではないか。以下にその詩と訳を掲げる。

#### L'INVITATION AU VOYAGE

Mon enfant, ma sœur,

Songe à la douceur

D'aller là-bas vivre ensemble!

9 同書、14頁。以上の引用歌は、読みやすさをめどに表記で変更した。

10 『会津八一全集』第6巻、6-11頁。

Aimer à loisir,  
Aimer et mourir  
Au pays qui te ressemble!  
Les soleils mouillés  
De ces ciels brouillés  
Pour mon esprit ont les charmes  
Si mystérieux de tes traîtres yeux,  
Brillant à travers leurs larmes.

(...)

Charles Baudelaire, *Les Fleurs du mal*<sup>11</sup>

わが子よ、わが妹よ  
思ってもごらん、彼方に出かけて、  
二人で暮らすその甘美さを！  
ゆっくりと愛し合い、  
愛して、そして死ぬ、  
それもお前によく似たその土地で！  
靄のかかる空に潤んだ太陽が  
私の心には、まことに不可思議な  
お前の裏切りの  
まなざしの魅力をたたえて  
その目に浮かぶ涙の向こうで輝いている。（訳は論者による）

この「靄のかかる空に潤んだ太陽が（略）その目に浮かぶ涙の向こうで輝いている」とあるのは、詩人が見る恋人の涙に潤んだ瞳に映っている太陽（さればこそ太陽は靄で潤んでいるのだ）を、遙かに幻像として捉えるのである。それは三好の詩で乙女が見はるかす青空を、詩人もまたその瞳の映るものとして「見る」幻影に等しい。三好が「作品『梵のうへ』ぜんたいが、もともと架空、どこかの場所に実在するどんな寺院をも、それは指してゐない。現実の背景はまったく、ありはしないのだから<sup>12</sup>」と自身がいみじくも言うように、詩人の幻影を実に美しく歌うボードレールと、まったく同じ技巧が用いられているのだ。「梵のうへ」という清澄な詩が、日本的なようで、

11 Charles Baudelaire, *L'Invitation au voyage* in *Œuvres complètes* 1, éd. Pléiade, 1975, p. 53

12 三好達治「梵のうへ」、前掲書、287頁

どこかバタ臭い、西洋的な詩、という印象を受けるのは、そうした詩の背景がおのずと映し出されるからにはほかなるまい。<sup>13</sup>

フランス詩とのかかわりでさらに注目すべきは、三好のこの詩が、ローマ字表記で示せばさらに明らかなように、最初の詩句から「ながれ nagare」、「ながれ nagare」、一詩句飛んで、「ながれ nagare」、「あげて agete」と e の音で韻が踏まれ、そして「行くなり ikunari」、「うるおひ uruoi」、「廂々に hisasi bisasi ni」、と今度は i の韻が多用されて、最後の詩行「鰯のうへ ishi no ue」が、流動する音、連続する音を象徴するエの律動で終わっていることだ。

一般に日本語の詩で押韻を施すことが、きわめて困難であることは、先人たちの試みの多くが失敗したことを想起すれば十分だろう。九鬼周造は、「日本語詩の押韻」について論じ、日本の古今の詩、万葉集から芭蕉の俳句、現代詩にいたるまでを渉猟、さらにラテン詩、漢、唐詩、英仏詩まで例に引く、文字通りの博引傍証の議論を展開しているが、彼が挙げる日本の作例のいずれも、多少は意識したところもないではなかろうが、ほとんどが偶然の産物のように思われるものばかりだ。その証拠に、九鬼自身が押韻を自覚しての作例は、ほとんど詩の体をなしていない。たとえば

詩

裏切りし言葉は<sup>むご</sup>惨く  
詩は<sup>かな</sup>哀し情火の末路  
いつしかと冷たき<sup>むくろ</sup>骸  
唱ふるは何の題目

(以下略)<sup>14</sup>

他の詩もほぼ同様だが、押韻するために無理なこじつけや論理の破綻を免れていない。戦後九鬼の所説に触発された若い文学者たち、中村真一郎、加藤周一、福永武彦たちは「マチネ・ポエチック」を立ち上げ、詩作を発表したが、「運動は数年にして止んだ。私を含めてその仲間、活動の舞台を散文の領域に拡げて行くことになり、押韻の実験も中絶したままになった。そして当時を知る人は、その運動が詩壇のなかで、四面楚歌だった、ほとんど悪罵の声に埋もれて終わった有様を、今も記憶しているだろう」と中村真一郎自身が述懐している通りの結果に終わった。<sup>15</sup>

13 東大仏文の恩師である辰野隆は、三好の学生時代、ボードレールを講じており、『ボオドレエル研究序説』（第一書房、昭和4年）はその成果である。三好はその書評を「帝国大学新聞」に翌5年3月に書いており、彼自身ボードレールの散文詩『巴里の憂鬱』（昭和4年厚生閣出版刊）を翻訳上梓して、ボードレールの詩に高い関心を示した。

14 九鬼周造『押韻論』、『九鬼周造全集』第5巻、岩波書店、昭和56年、426-427頁

注意すべきは、九鬼の「押韻論」の初出が昭和5年3月に出て、それが昭和6年10月の岩波講座『日本文学』に「日本詩の押韻」と題して発表されていることだ。三好の『測量船』は同じ年の12月。もっとも「鵬のうへ」の初出は同人誌『青空』で、大正末年のことだが、九鬼がその著で記すように、日本語詩の押韻の問題を考えたきっかけは、フランス滞在時のフランス語詩に親しむ機会が多くなったことにある。同時期三好もまたフランス語の詩を学んで、同じように押韻の秘儀を研究する機会があったに違いない(先述の藤村詩の分析にもそのことが示されている)。『測量船』刊行に先立つ九鬼の論考には、三好の詩は取り上げられていないが、のちに昭和16年の名著とされる『文芸論』中の「日本語の押韻」には、先の版に多くの増補を行っていて三好の詩も引用されているが、別の詩の数行がただ一つ、日本詩の体言止めの例に引かれているに過ぎない。もし九鬼が押韻の好例として「鵬のうへ」を知っていたら、おそらく押韻の好例として引いたのではなかろうか。いずれにしても、九鬼といい、三好といい、フランス詩の体験が押韻への関心に大きく作用したことは疑いない。<sup>16</sup>

#### 4. 詩人の形成

三好達治とフランス詩の関わりを考え上で、三好達治がどのような過程で詩人になったか、その生涯について簡単に触れておこう。三好達治は明治33年(1900年)、大阪市西区西横堀町の生まれ。父は特殊な印刷技術を持つ職人であった。市岡中学に進むが、軍人崇拜の父を喜ばせようと1915年陸軍幼年学校に入り、剣道やフランス語を熱心に学んだ。士官学校に進んだところで、父の職人氣質が災いして家業が傾き、1921年21歳で中退する。士官学校の同期には後の2.26事件の首謀者が数名いる。太平洋戦争勃発以降敗戦まで、戦争を讃える詩作に傾いたのは、彼の中の何かが後を押していたのかも知れない。

家業を助けるはずが名人氣質の父と合わず、彼は親戚の援助を得て三高に進み、桑原武夫、丸山薫、貝塚茂樹らを友人としたことは、彼らの回想に詳しい。そして昭和

15 中村真一郎『『日本詩の押韻』とマチネ・ポエチック』、『九鬼周造全集』第5巻「月報」6。

16 たとえば『測量船』補遺にある「昨日はどこにもありません」という詩は、

昨日はどこにもありません  
あちらの箆箭の引き出しにも  
こちらの箆箭の引き出しにも  
昨日はどこにもありません

そこは昨日の写真でせうか  
そこにあなたの立つてゐる  
そこにあなたの笑つてゐる  
そこは昨日の写真でせうか

以下、すべてソネットの押韻のように、韻が重なって変化している。繰り返しの多い単調さが、三好の詩の欠点とされるが、そこには多少この押韻の意識が影響しているのかも知れない。

2年東大仏文科に進学、同級生には小林秀雄、今日出海、中島健蔵、淀野隆三など、後に名を知られる秀才がおり、国文科には堀辰雄がいた。後に太宰治が大学時代をカリカチュア風に語った小品の中で、フランス文学の試験を受けるにあたっての心境を書いたものがある。

やがて、あから顔の教授が、ふくらんだ鞆をぶらさげてあたふたと試験場に駆け込んで来た。この男は、日本一のフランス文学者である。われは、けふはじめて、この男を見た。なかなかの柄であつて、われは彼の眉間の皺に不覚ながら威圧を感じた。この男の弟子には、日本一の詩人と日本一の評論家がゐるさうだ。日本一の小説家、われはそれを思ひ、ひそかに顔をほてらせた。(太宰治「逆行」、『晩年』所収)<sup>17</sup>

この教授は辰野隆、日本一の評論家とは小林秀雄のことであり、日本一の詩人とは、ほかならぬ三好達治だろう。太宰治のこの文章が発表されたのは、昭和10年10月7日発行の「帝国大学新聞」で、その頃には三好の詩人としての名声が確立していたものと見える。

しかし三好達治が大学時代交遊をもっとも深くしたのは梶井基次郎だ。梶井は京都の三高から東大国文科に進みはしたものの、重い結核と闘いながら清冽な小説を書いていた。梶井と同じ下宿にこもって編纂した同人誌『青空』は、梶井の傑作、例えば「檸檬」が掲載されたことでも有名だが、三好の「乳母車」、「螢のうへ」などの名作も同誌に掲載された。

昭和2年三好が最大級に尊敬する詩人萩原朔太郎に紹介される。朔太郎は下宿も紹介する好意を示すが、彼にとって記念すべき朔太郎との出会いは、同時に生涯の愛の出会いともなった。すなわち朔太郎の妹の萩原アイを知り、再度破婚して家に帰って兄夫婦と同居したアイとの結婚を真剣に考えることになるのだ。このあたりの三好の無骨な恋愛の表現については、朔太郎の長女萩原葉子が小説仕立てで、彼とアイの個性を活写している。<sup>18</sup>翌年東大仏文科を卒業、卒業研究はヴェルレーヌだった。ヴェルレーヌが乱酔と悔悟の繰り返しのうちに綴った詩集『叡智』を卒論のテーマとしたことは、後の詩人の運命を遙かに予想させるかのような皮肉な思いに駆られる。

卒業と就職は萩原朔太郎の母親の厳命で、アイと結婚するためにどうしても突破しなければならない関門だった。彼は北原白秋の弟が経営する出版社「アルス」に就職し、出版予定のファールブル『昆虫記』の翻訳に取り掛かるが、これは結局出版されず、

17 『太宰治全集』第2巻、筑摩書房、1998年、188頁。

18 萩原葉子『天上の花—三好達治抄—』、新潮社、昭和41年、12-13頁。萩原アイは慶子と変名されている。

三好も退社を余儀なくされる。失職は萩原アイとの結婚を断念することでもあった。しかも肝心のアイは達治の求婚を喜んだわけではなく、三好の一方的な片思いで、アイは達治の求愛に首を立てに振らず、同じ詩人ながら当時歌謡曲の作詞で人気も高く、収入も多い佐藤惣之助と結婚することになる。以後十年間、三好達治はひたすら翻訳で糊口をしのぐ。

たとえば新潮社世界文学全集のゾラ『ナナ』の下訳とか、ボードレールの散文詩『パリの憂鬱』の全訳、そしてファーブル『昆虫記』<sup>19</sup>。東大仏文での三好の先輩にあたる岸田國士は、同じ士官学校中退組で、三好は34歳の時、彼を媒酌人として詩人佐藤春夫の妹智恵子と見合い結婚する。アイを諦めての結婚は、あるいはその前年、親友梶井基次郎が亡くなり、心境に変化を来したからかも知れない。

## 5. ジュール・ルナールとフランシス・ジャム

詩集『測量船』以降も、フランス文学の翻訳で糊口をしのぎながら、三好達治は詩を書き続けていく。フランス詩とのかかわりは依然として彼の詩業に色濃い。たとえば『測量船』補遺にある「川」、「池」、「嘶」といった作品は、岸田國士が大正13年に訳出して評判となったジュール・ルナール (1864-1910) の『葡萄畑の葡萄作り』(1894) や『博物誌』(1896) の筆法に倣ったところが顕著に見える。

鵲 — 川の石のみんなまるいのは、私の尾でたたいたためです。

河鹿 — いいえ、私が遠くからころがしてきたためです。

石 — 俺は昔からまるかつたんだ。 「川」

鯉 — いくたびか鮒たむろする今朝の秋

鮒 — 二三枚うろこ落として鯉の秋 「池」

駱駝 — 俺はそんなちっちゃな孔を通らなけりゃ天国へゆけないのかなあ。

針 — いいのよ、私がとほつたと云つてあげるわ。 「嘶」<sup>20</sup>

辰野隆は「ジユウル・ルナアルの目」という文章で、詩人三好達治の『南窗集』(昭和7年8月刊)の中に、

19 二千枚に及ぶこの翻訳は結局出版されなかった。余談ながら、三好と同じく陸軍幼年学校に学んで文学や文筆活動に転出した者に大杉栄、岸田國士がいる。大杉栄も『昆虫記』の全訳に取り組んでおり、これは大正11年出版されて、日本最初の『昆虫記』全訳となっている。

20 『三好達治全集』第1巻、筑摩書房、昭和39年、96頁 初出は昭和2年。

蟻が  
蝶の羽をひいて行く  
ああ  
ヨットのやうだ。

といふ四行詩がある。之も亦ルナアル的感興—ルナルディイズである。<sup>21</sup>

と書いている。自分の弟子である三好へ、の師らしい心遣いが感じられる評だが、『南窗集』の中には、この「土」と題する詩ばかりでなく、

「蠶」  
「あんなに青かつたのが  
こんなに黒くなつたでせう  
そうれ  
ごらん」

といった詩など、いちいち挙げることはしないが、ルナールを読んだものには、そのままルナールの引き写しと見えるような作品が多く見られる。<sup>22</sup>

しかし昭和9年刊行の『閒花集』や翌年の『山果集』には、むしろ三好が当時愛読したフランシス・ジャム（1868-1938）の影響が強いようだ。三好は昭和初期に多くのフランス詩をいくつかの詩誌に発表しているが、中でも多くを訳出しているのはジャムの詩である。ジャム詩の一例に「雪が降る」の冒頭4行を引く

Il va neiger  
Il va neiger dans quelques jours. Je me souviens  
De l'an dernier. Je me souviens de mes tristesses  
Au coin du feu. Si l'on m'avait demandé: « Qu'est-ce? »  
J'aurais dit: « Laissez-moi tranquille. Ce n'est rien. »<sup>23</sup>

（以下略）

21 『辰野隆著作集』第1巻、改造社、昭和24年刊、551-552頁。初出は1933年4月『え・びあん』。

22 日本におけるルナールの影響については、柏木隆雄『交差するまなざし—日本近代文学とフランス—』（朝日出版社、2008年）第4章、227-327頁に詳しい。

23 Francis Jammes, *Il va neiger*, dans *l'Anthologie de la poésie française*, le XIX<sup>ème</sup> siècle, tome 3, éd. Rencontre, 1967, PP. 455-456.



雪が降る

雪が数日後に降るだろう。私は思い出す

去年のことを。私は私の悲しみの数々を思い出す

暖炉の傍で。誰かが私に「どうしたのか？」と尋ねていれば

私はこう答えたに違いない。「そっとしておいてほしい。何でもないんだ」と。

(訳は論者による)

詩句の平明、ものとしてそこはかとなない叙情。真率な詩情。三好達治の表現しようとしたものが息づいている一例を掲げたが、昭和4年から数年間、三好は熱心にジャムを読み、訳詞もボードレールを除く他のどの詩人より多い。たとえば「野苺」。

緑の襟飾りをつけた そしてわれわれのよりも

情深い 深紅の小さい心臓よ

お前は何の躊躇もなく 自分をそつくり与えてしまふ

路ばたに歩みをとめた 貧しい人に！<sup>24</sup>

あるいは、「鵲鴿」。

足もと軽く走ると見れば びたりと彼は立ちどまる

それでも尾だけは <sup>はかりざお</sup> 秤 棹のやうに振りつづけて

平均をとつてゐる 右に二歩左に三歩

ちよいと様子をつくつて さてまた今度は眼にもとまらぬ足の運び<sup>25</sup>

「野苺」は『セルパン』誌(昭和6年9月刊)、「鵲鴿」は『生理』第2冊(昭和8年8月刊)に掲載された翻訳詩だが、そのほか『四季』第2冊(昭和8年7月刊)に収められたものを含め全部で30編。長きにわたって彼がジャムを愛好していたことがわかる。ジャムの詩の余波は、ジャムの訳詞と同じ題の「鵲鴿」(『南窗集』)に見える。ルナルディーズとも言えるが、それよりもいっそうジャムの詩句や詩興に近い。

<sup>もみじ</sup> 黄葉して 日に日に山が明るくなる

谿川は それだけ緑りを押し流す

24 三好達治「九月(フランシス・ジャム)」、『三好達治全集』第12巻、46頁。

25 同書、51頁。

白いひと組 黄色いひと組 <sup>せきれい</sup> 鶺鴒が私に告げる  
「この川の石がみんなまるいのは 私の尻尾で<sup>たた</sup> 敲いたからよ」<sup>26</sup>

さらに『閒花集』になると、ますますジャムの世界に似た風景が展開される。

村の犬

かすかな木魂さへそへて 犬が啼いてゐる 静かな昼の村  
私はそこに立ちどまる 庭の隅 蔵の前だな  
一つの屋敷の奥で 犬が啼いてゐる  
川向ふの葱畑から  
またひよいと犬がとび出して 耳を傾ける<sup>27</sup>

昭和10年刊行の『山果集』は、更にジャム的な世界に沈潜するが、作例を挙げるには紙数が限られているので、題名のみを挙げておこう。「海辺」、「黎明」、「鮎」、「一隅」等々、枚挙に暇がない。一つだけ引用する。

椋鳥

日ひと日 うら山の山懷に  
おんなじことを喋つてゐる 椋鳥の群れ  
松の間 椎の梢に 二羽たち 三羽たち  
やがてまた 緑にかくれて…<sup>28</sup>

この詩など、以下に引く三好によるジャムの訳詞に、その詩境が似てはいないか。

遠い春

私はそこに 私の青春を垣間見る それは一株の野薔薇  
陽のもとに いま花盛り <sup>まがき</sup> 籬の外へ差しのべた  
小径の空のその枝は  
小鳥に触れて しばしがほどは揺れやまぬ<sup>29</sup>

---

26 『三好達治全集』第1巻、140頁。

27 同書、157頁。

28 同書、189頁

29 「4行詩集から」、『三好達治全集』第12巻、46-47頁。

こうした田園や自然の中の人生をテーマにした詩は、やがて時間とともに醇化され、友人たちからの、ジャムに就きすぎるといふ批判をも咀嚼しながら、ジャムから徐々に離れ、ほぼ5年にわたる精進を経て、新たな彼の世界が形作られたのは、昭和14年に発表された『艸千里』であった。しかしそのすぐ後に大きな事件が二つ待っていた。一つは昭和16年の太平洋戦争勃発であり、いま一つは昭和17年の、彼が敬愛して止まなかった詩人萩原朔太郎の死である。

## 6. 詩人のその後

朔太郎の死は、三好達治にとって戦争以上に大きな衝撃であった。同時に、かつて彼の求婚を拒絶して、詩人佐藤惣之助のもとに嫁いでいた、その妹萩原アイへの、一度は断ち切った思いを、また強く意識させることにもなった。昭和16年4月の詩に「家庭」と題するものがある。

### 家庭

息子が学校へ上るので  
親父は毎日詩<sup>うた</sup>を書いた  
詩は帽子やランドセルや  
教科書やクレイヨンや  
小さな<sup>こもりがき</sup>蝙蝠傘<sup>ふぶくさ</sup>になつた  
四月一日  
桜の花の咲く町を  
息子は母親につれられて  
古いお城の中にある  
国民学校第一年の  
入学式に出かけていつた  
静かになった家の中で  
親父は年取った女中と二人  
久しぶりできくやうに  
鴨<sup>鴨</sup>どりのなくのをきいてゐた  
海の鳴るのをきいてゐた

(『一點鐘』<sup>30</sup>(昭和16年10月))

子供の入学費用を稼ぐために、必死になって詩を書き綴り、それで買ったランドセ

---

30 『三好達治全集』第1巻、415-416頁。

ルに喜んで、息子は入学式に母親と行く。それをいかにも満足げに見送り、式の有様を想像する、まことに家庭的な詩人の姿がそこにある。しかし彼の心の隅に燐火のようにくすぶっていた萩原アイへの未練な情念は、この詩を書いた翌年の昭和17年アイの夫佐藤惣之助が亡くなって、彼女が独り身になったと知って熱く燃え上がることになる。萩原朔太郎が亡くなったの葬儀や後始末の際に、何度かアイと会う機会があったことも、恋情をふたたび燃え上がらせる要因になった。昭和18年三好は妻子と離別、5年間住んだ小田原を捨て、伊豆に赴き、のちに詩集『花筐』<sup>がたみ</sup>に収められる詩を書き綴ることになる。その詩集こそは、萩原アイへ捧げる、含羞に満ちた叙情恋愛詩だった。その序に当たる詩「遠き山見ゆ」で、

遠き山見ゆ  
遠き山見ゆ  
ほのかなる霞<sup>かすみ</sup>のうへに  
はるかに眠る遠き山  
(略)  
ああなほ彼方に遠く  
われはいまふとふるき日の思出のために  
なつかしき涙あふれいでんとするににたる

『花筐』<sup>がたみ</sup> (昭和十九年六月)<sup>31</sup>

ここに言う遠き山は、もちろんアイの形象にはかならない。たとえば、

ねむの花さく  
ねむの花さくほそ路を  
かよふ朝こそたのしけれ  
そらだのめなる人の世を  
たのめて老いしみなれども

とか、

かへる日もなき  
かへる日もなきいにしへを

---

31 『三好達治全集』第2巻、163-164頁。

こはつゆ艸の花のいろ  
はるかなるものみな青し  
海の青はた空の青

あるいは、

艸の庵の  
艸の庵<sup>いほり</sup>のまれびとは  
まひるの庭の白芙蓉<sup>はくふよう</sup>  
海のごゑさへとよもして  
そぞろごろのはてもなき<sup>32</sup>

等々、いくらでもその例を挙げられるが、短詩およそ30篇はことごとくアイへの恋情を歌ったものだ。そして彼女と一緒に暮らす喜びへの期待に、それこそ「そぞろごろ」も無い姿態が、いわば手放しの喜びの表現で溢れている。昭和19年3月、知人の紹介ではるばる福井県三国に來た彼は、彼女をひたすら待ち、4月妻子と離別、5月にアイと正式に結婚、翌6月詩集『花筐』を刊行するのである。大正14年の東大入学以来恋慕してきたアイと、ようやく一つ屋根の下で暮らすことになったのだ。しかし現実にはさまざまな点でアイと齟齬することが多かった。そのことは酷なほどリアルに萩原葉子が『天上の花』のアイとの不毛な結婚生活を暴いた文章で知られるが、あまりに生々しい悲劇をここでは引くまい。三国での達治の新婚生活を見た友人の言葉がある。

(前略) ある状況が出しぬけにやってきて何らかの事実の前に一三好さんは華やいで、幸福にみち、氣負った顔もはればれとしていることが目立った。自己忘却の夏の季節でもあった故か兎に角三好さんの期待が実現したのだ。

愛子さんは今でも吾々の語りぐさになるほど可憐な美しさがあって、ストイックな骨組みをもった三好さんにはセンシユアルすぎるのではないかと蔭口をたたいたこともあった。(中略)

愛子さんは傍で三好さんの銀の細ぶちの眼鏡をかけて「竹取物語」等をひもといて、一瞬馥郁和幸福にみち、物倦い初夏の海の香さえはなやいでいた。この前後に「花<sup>がけ</sup>筐」が

32 同全集同巻。167、199頁、

33 萩原葉子、前掲書。

上梓された。

小野忠弘（筑摩『三好達治全集』第7巻月報）

この『花<sup>がたみ</sup>筐』について、シナリオ作家の田中澄江が、同じ三好の全集の月報にこう記している。

小さな、ポケット版ともいえるような形で、それでも表紙には紺地に黄と朱の二色染めの菱形模様が描かれていた。青磁社という版元であった。

田中澄江（筑摩『三好達治全集』第6巻、月報）

論者は3年ほど前、福井市で三好達治について話す機会があった際、三国時代の三好達治から直接手渡されたという『花<sup>がたみ</sup>筐』を知人から見せて頂いたことがある。まことに瀟洒な、それこそ18世紀フランス貴族の上流夫人が掌に弄んだような、軽やかな装丁の詩集であった。

当時の三好の心境を語る詩を見てみよう。

いまこの庭に

いまこの庭に

薔<sup>ばら</sup>薇の花一輪

くれなゐふかく咲かんとす

彼方には

昨日の色のさみしき海

また此方には

枯枝の高きにいこふ冬の鳥

こはここに何を夢みる薔薇の花

いまこの庭に

薔<sup>ばら</sup>薇の花一輪

くれなゐふかく咲かんとす<sup>34</sup>

---

34 『三好達治全集』第2巻、190頁

ここで歌われる薔薇一輪は、もちろんアイのこと、枯れ枝に高く憩う鳥は達治。彼の期待の大きさがまざまざと示されている。しかしこれほど期待していた恋人は、妻として必ずしも詩人を満足させず、また妻も詩人にまったく満足しなかったことは、萩原葉子の著書に詳しい。結局わずか半年で二人は別れてしまう。この時期、達治の詩は多くはない。戦争も末期の昭和20年1月、アイと別れる直前に刊行された『春の旅人』4篇のうちの1つに詩人の心境が、以下のように歌われている。

松子

昨日こし松の林に  
今日もまた来たりてひろふ  
松ちちれ籠<sup>こ</sup>にはみてれど  
空<sup>むな</sup>しただ遠きころは  
  
一人すむ旅<sup>かりや</sup>の飯屋に  
一人焚<sup>た</sup>く松のちちれ火  
赤あかと飯<sup>いい</sup>かしぐ間も  
空<sup>むな</sup>しただ遠きころは

(後略)

『春の旅人』(昭和20年1月)<sup>35</sup>

松の子と書いて、「まつかさ」と読み、松ちちれ、も同じ。松の孤高の精神を映しながら、同時にあの赤茶けて、転がる松傘に、詩人は己自身を重ねている。しかも松はそれこそ「待つ」の意味をも含む。何を待つのか。やがて来るものを待つ身の、あたかも松傘が燃えるような、赤くただれるような寂寥を嘯みしめた詩と言えよう。

以後、三好達治は、まる4年の間、三国の海辺の家に孤独を養うことになる。

昭和24年2月、彼は三国を去って東京に居を移し、いっそう孤独な人生を大都会の中に営み始める。以後、詩人としての名声と、いくつかの詩集、たとえば『駱駝の瘤にまたがつて』などの名詩集を世に問い、芸術院賞を受賞、さらに芸術院会員となつて、詩人としての栄誉の大抵を手に入れるが、その根底に三国における、石川淳的に言えば「幽居」の体験が、深く横たわっているように想われる。

昭和37年、彼の最晩年の詩集『百たびののち』に収められた多くの詩は、三国での感慨を思い出してのものが多くに気づかされるだろう。

---

35 『三好達治全集』第2巻、339頁。



たとえば

花の香

私は思ふ 暖かい南をうけた遠い丘  
そこに群がる水仙花 黒潮に突出た岬  
かの群落を思ふのは  
さうして旅支度<sup>たびじたく</sup>を思ふのは  
この年ごろこの季節の私の習ひ<sup>なら</sup> 白昼夢  
今日また炉辺にそれをくりかへす  
芳香<sup>はうこう</sup>はもう鼻をうつて 部屋に漂ふ

噫 ある年の雪の朝  
戦に敗けて帰つてきた海軍さんから  
梅を一枝もらつたけ<sup>(ママ)</sup> 丈<sup>たけ</sup>は丈余<sup>じょうよ</sup>  
天井につかへ この部屋の半ばを領した  
白昼夢はその芳香にもまたつながる

(後略)

『百たびののち』(昭和37年3月)<sup>36</sup>

そのことは、この詩集が出たのと同じ年、すなわち達治62歳、死の2年前にあたる昭和37年9月26日に朝日新聞に寄せた文章、「越前・三国 ―わが心のふるさと―」と題したエッセーにも明らかだ。彼はそこで

九頭竜川は北陸一の長河である。三国町はその河口に「帯のはばほど」につづく古い町なみである。人口は萬ばかりであつたが、お寺の数は十の餘もあつた。小さな佛壇屋さんが何軒かあつた。私はその静かな町の、町はづれの雄島村米ヶ崎脇<sup>37</sup>(現三国町)といふのに何年か暮した。

と書き始めて、9月の時雨の気まぐれな空模様が、秋が深くなって玉あられとなって軒を打つ風情を懐かしんでいる。春の詩人として出発して(彼は揮毫を求めらると『測量船』の冒頭の詩、「春の岬」を書いた)、晩秋、あるいは冬の詩人として終わる彼の一生に位置する三国は、詩人の生の縮図を呈しているのかも知れない。

36 『三好達治全集』第3巻、265頁。

37 『三好達治全集』第12巻、237頁。